

障害のある研修員紹介 (DETファシリテーター)

JICA, ウランバートル市における障害者の社会参加促進するプロジェクト

エルデネゾルさん、復帰から自立、そしてリーダーへ



ゾルさんは、4年前の交通事故で首を骨折。これが原因で両脇から下を動かすことができなくなりました。当時は教育大学の1年生。「学びたい」という思いから、仕事を離れて進学した直後のことでした。事故から1年間休学して、大学に戻りました。3年生に復学して、休んだ2年生の分も勉強したので、当時は1日中勉強していました。大変でしたが、お陰で同級生と一緒に4年でジャーナリスト学科を卒業できました。

大学では学内の移動に一苦労。同級生が3階の教室まで背負ってくれたり、車椅子を運んでくれました。勉強も問題なく、充実した学生生活を過ごしていましたが、ある日、タクシーで大学に向かう

と、運転手に「どうせ就職できないのだから、勉強する必要はない。家族に負担をかけて、自分も苦労して、外に出る必要があるのか。」と言われました。ショックで3日間家から出られなくなってしまいました。大学を辞めようか、外に出るのが恥ずかしいと。でも次第に、私はこんなに努力しているのに、なぜ周囲が私のことを決めようとするのか、と憤りを感じて、やはりもっと外に出ようと思うようになりました。

私を支えてくれたのは、生活や通学を応援してくれたお母さんと、愛娘フスレンの存在。特に、事故当時6歳だったフスレンは、幼いながらも私の身の回りのことを手伝ってくれました。11歳の今では、すっかり大人のように振舞っています。大学卒業後はユニバーサル自立生活センターに勤務。このセンターのウンドラフバヤルさんのように障害のある人達の権利を守る活動をする、そして女性のリーダーになることが目標です！

「おしゃれで自分を表現」 エンフマーさん



四肢マヒを持つエンフマーさんは、ファシリテーターの中で最もおしゃれな存在。洋服選び、メイクや髪形など、周囲の人々が振り返るほど毎日素敵な装いをしています。

おしゃれはお姉さんの影響。いつもきれいなお姉さんの姿を見て、自分もそうありたいと努力しています。障害の特徴から、体に振動があるので、服や髪に乱れがないか、細部まで気を遣っています。普段の生活には問題ないのですが、歩くと

きに少しだけバランスが崩れます。

スポーツで社会参加の道を拓いたボルドバートルさん

ウブス県で育ったボルドバートルさんは、高校生の時に突然目が不自由になりました。ウランバートルでも治療を試みましたが、回復せず、長い間実家で過ごしていました。ある日、テレビで視覚障害のある人が柔道をしているという報道を聴き、体中を電流が走りました。スポーツができるなんて！すぐに親に頼んで連絡先を調べてもらいました。パラリンピック事務所の方と電話で話すと、近い内に視覚障害のある人に関する会議が開催されるという情報を得たので、ウランバートルに向かいました。会議の席で、視覚障害者国家協会の方と出会いました。これが縁で、デンマークが支援するリーダー育成研修に参加。ウブス県に戻って、視覚障害者国家協会の支部を立ち上げました。支部長として、視覚障害のある人達



に様々なサービスを提供してきましたが、中でも力を入れたのはスポーツの普及。自らも柔道を始めて、全国大会でもトップクラスになりました。「私たちはスポーツができる」。今でも社会参加の大きな原動力だと思っています。現在、ウランバートルに移り、協会本部の事務局長を務めながら、障害平等研修 (DET) ファシリテーターとしても活動中。誘導ブロックが途切れていたり、設置されていてもその上に鉄柱やゴミ箱が置かれたりと、障害のある人が一人で出歩ける環境はまだ整っていません。施策や予算を担当する行政機関で決定権のある人材を対象にDETを実施していきたい、強い希望を持っています。ある省庁の元大臣が、視覚障害のある人が働くコーヒーショップを訪れた時のこと。「どうせ仕事ができないのだから、手当をもらって家にいればいい」と発言したそうです。パリスタの訓練を受け、自信を持って働いていた彼女たちは、大変ショックを受けていました。この報告を受けて感じたのは、意識のバリアの強さ。長い道のりになると思いますが、使命感を持って改善に取り組んでいきます。

私にとっての障害は、周囲の視線。お店に入ると驚いたような目で見られることがあります。私は何も悪いことをしていないのに・・・。DETファシリテーター養成講座に参加して、障害とは何か、どこにあるのかを理解しました。将来この分野で活動したいと思っていましたが、方法がわかりませんでした。ファシリテーターになって、これから学校でDETを行ってみたいです。子ども達や先生に障害について理解してもらおうことが大切と思うからです。

外国語に興味があるエンフマーさん。英語と中国語の勉強をつづけながら、ファシリテーターとして活動を開始します。

「教育こそ、社会参加への扉」 ボロローさん



障害平等研修（DET）ファシリテーターの中で最も多くDETを行っているのがボロローさん。これまでに89回、延べ3,976人がボロローさんのDETに参加しました。労働社会保障省の職員として仕事をしながら、シニアファシリテーターとしても活躍中です。

生まれる時の処置が原因で脳性マヒに。5歳まで寝たきりで、座ることもできませんでした。

「学校に行きたい！」家で体を動かす練習を開始。ペンを持つ特訓もしました。まだ手足の動きに不自由がありましたが、9歳から学校に通い始めました。

学校は一般の小学校。周囲の子ども達に怖がられたり、いじめられたこともありました。お母さんが校長先生に相談すると、先生が各クラスを廻って、他の子ども達と変わらないこと、一緒に勉強する仲間であることを説明してくれました。

大学に進学する時、お母さんから「経理を学んで、人前に出ない仕事をしてほしい」と言われたことがあります。なぜ私は隠れなければいけないの？もっと表に出て、社会を変える人になりたいと思うようになりました。モンゴル国立大学に入学し、政治学と社会学を専攻しました。学生当時、新聞を読むと、障害に関する記事は、車椅子の寄付のことばかり。意義のあることですが、それだけでは私が経験してきた障害はなくならないのでは？疑問を持つようになりました。

2年前にDETファシリテーター養成講座に参加して、人は元々多様であること、多様性を受け入れられない社会が障害を生み出していることを知りました。私が直面してきた問題を解決するには

DETしかない！とこの手法を広めていく決心をしました。

今までの道を振り返ると、社会参加を進める幾つかの大切な出来事がありました。その一つは小学校の頃。机が高すぎて困っていると、先生が低い机を用意してくれました。教育は社会参加への第一歩。特に基礎教育が受けられれば、本人の努力次第で高等教育に進むことができます。学校が私に合った環境をつくってくれたこと、障害のない子ども達と一緒に学んできたこと。これらが今の私につながっています。

「以前は、脳性マヒの代表になりたいと思っていました。でも今は違います。差別や排除、参加の制限はどの障害者にも共通する問題。だから、すべての障害者の代表を目指します！」

「障害のある子ども達に、発達チャンスを」 ウヤンガさん



ウヤンガサイハンさんはDETファシリテーターの第一期生。2016年12月に養成講座を修了して以来、活発にDETに取り組んでいる一人です。発語に障害があり、自分の思いを伝えることが難しく、緊張するとますます話せなくなってしまいます。歩くときに少しバランスが崩れるので、街中でよく人に見られます。人々の視線、意識をどうしたら変えていけるのでしょうか。ファシリテーターになって、人前で話せるようになったことを家族がとても驚いています。

今でも緊張しますが、演習の一つ一つを練習して、もっとスムーズにできるようになりたいと思っています。学生の頃、一般の学校に通っていました。書くことに時間がかかるので、友達からノートを借りて、家で勉強していました。高校に進学したかったのですが、当時学校から「あなたはもう十分勉強したのだから、高校に行かなくていい。」と言われ、進学ができませんでした。ファシリテーターとして、様々な組織でDETを行ってきましたが、今後は、学校を対象に実施してみたいです。学ぶ機会を作るには、何がバリアか、ぜひ一緒に考えていきたいと思います。障害がある子どもを持つ親に伝えたいこと。それは、「子どもには一般の人と一緒に発達する機会が必要。子どもの時から社会に出してほしい。・・・ファシリテーターとしてどんどん成長するウヤンガさんの家族からのメッセージでもあります。

スーパー介助人・ジャガーさん



介助の仕事は、辛い仕事でしょうか？

プレブジャルガル（通称ジャガー）さんは、夫のポーギーさん(12月17日にFBで紹介)との出会いがきっかけで介助の仕事を始めました。「体力的に疲れるときがあるけれど、利用者と話すことが楽しい。毎日笑いが絶えません。」と話しています。介助をしていて困るのは階段。スロープやエレベーターがない

施設では、周囲の人に応援を頼んで利用者を運んでいます。でも、「介助者のお陰で外出ができる。これまでずっと家で過ごしていた。」と言われると、うれしくて、この仕事をしで良かったと笑顔を輝かせています。

ジャガーさんのもう一つの顔は障害平等研修（DET）のサポーター。介助者として何度もDETに参加するうちに、誰よりも詳しくなり、次の演習の準備を率先して進めるようになりました。今ではDETの実施に欠かせない存在。「スーパー介助人」と呼ばれるようになりました。

「DETは、モンゴルで最も必要な研修。演習を通して参加者の意識や態度が変わっていくのを目の前で見ていると、やりがいを感じます！」。モンゴルの障害の問題は、段差をなくすだけでは足りません。障害のある人達に対する人々の目を変えていかなくては。今日もジャガーさんははつらつと動いています。